

TENTI・TODAY			1
会員の広場(受信メール)			1
随筆	「日々をいとおしみて」より「後藤新平を思う」	宮川典子	2
調査	水産加工品はこうして作られる(上)	林 英一	3
歴史	「了解日本(日本を知る)」(11)「江戸文化の中の明・清文化」(前号つづき)	兪彭年	5
回顧	有楽町慕情(8)「石坂泰三元社長のこと」	津田孚人	8
講演会のご案内・新三木会			1 0
事務局			1 0

TENTI TODAY

梅雨のさ中のいつときの晴れ、暑いのに驚きました。街中では依然としてマスクをする人が多い。大勢順応型なので着用していますが、年を経るとともに暑さに弱くなり、今夏記録的な猛暑にならぬように願っています。

株価が急騰、日経平均は1989年12月の最高値3万8915円に手が届きそうになって来ました。直”自民党岸田政権の政策が良いから”といえないのが残念ですが、政権が安定しているのが大きなプラス材料になっています。海外資金が流入しているのは、その所為でしょう。さらに、日銀の低金利政策の継続、円安効果、に加えて、企業の自己株式の買い入れ、高配当政策など、つづき、世界経済も、底堅いので流れはしばらく続きそうです。

心配は、国債だのみの日本の財政状況。6月中旬、フランス国債が、財政悪化を理由に格付け大手のS&P社が格付けを下げたために売られました。独も伊も同じような状況にます。日本は、財政の悪化を、日銀の国債一手引き受けでしのいでいますが、国際的な評価の流れに同調すると、状況が一気に悪化する懸念があります。日銀の低金利継続策は、裏返すと、動くに動けない手詰まり状態にある、ともみえます。

会員の広場

受信メールから (5/22 村山さん 84歳)

久しぶりにお目にかかり嬉しいひと時を過ごさせて頂きました。相変わらずの好奇心と世の中に対する積極的なものの見方に感銘を受けました。また、「天地メルマガ」

のお届け、有難うございました。第一生命館の話だけ真っ先に読ませてもらいましたが、農中の持ち分を買い取っておられたのですね。

我が家の近くに農中の社員寮があったのがいつの間にかほかの名義になっていたことと突き合わせると、農中が低金利政策で苦勞していたのがよく分かります。

杉原千畝の話も少しだけ読み始めましたが、'71~'75NY 郊外で暮らしていたころ、隣家の夫婦が我々の面倒をよく見てくれたことを思い出します。当該夫婦はリトニア組ではなかったものの、ロシア革命で神戸に避難してきたユダヤ人夫婦で、同じように日本で米国のビザを取得してから米国に渡って来たとのことでした。

エッセイ集 宮川典子(94歳) 「日々をいとおしみて」(2022年11月)より

「後藤新平を思う」

客が帰り、後片付けを終えたのが午後五時半、テレビでも見てくつろぎたいと新聞に目を通した。BS8チャンネルに「後藤新平のいない日本」という妙なタイトルを見つけた。小学生の頃、父が「後藤新平は立派な人だったなあ」とよく言っていたのを思い出して、1時間半も続く番組だが、迷わずそれに決めた。

ナレーターが意外にも加藤登紀子であった。彼女の父が、戦前満鉄の社員であった頃、初代満鉄総裁の後藤新平に目を掛けられていたそうだった。太平洋戦争末期の1945年、不法にもソ連軍がハルピンに攻めてきた。彼女が生まれたのがその混迷のさ中だったと聞き、この番組のナレーターを務めるわけが分かった。

しかし、それ以上の驚きがあった。私の父の父、宮川船夫は、当時ハルピン総領事であった。彼は、ソ連軍に拉致され、残された母と中学生の三男、四男は住まいの領事館を追われた。長男は海軍に召し、次男は軍需工場に動員され内地にいた。母たちは知り合いの家を転々とし、苦勞の末、翌年秋に帰国した。登紀子一家は二年後に帰国したそうで、両家はどこかで接触があったかもしれない。

さて新平の業績とは、1857年に岩手県に生まれ、医学校を出て日清、日露戦争の帰還兵の検疫に手腕を発揮した。コレラ、ペストなどの恐ろしい菌の持ち込みを完全に阻止した。その時の上陸地が、瀬戸内海に面した二地点で、新緑の美しい現況がテレビに映し出された。他にも新平の幼い頃や、家族、医者としての姿のセピア色の写真が次々現れる。

特に印象深い場面があった。登紀子の父が新平の家を訪れた時、児玉源太郎が不意にやって来た。彼は日露戦争総参謀長で、後に陸相、文相を歴任した大物である。児玉が初代台湾総督の時、新平が民政局長で二人で台湾の近代化を成功させた。新平と、登紀子の父は満鉄で旧知の間柄で、こんな関係の三人が一室に会したのだ。新平はその後入閣、内相、外相などに就任、政界にも重きをなした。

1920年、彼は東京市長に就任し、龐大な都市計画を立てた。その案は直後の関東大震災の復興に大いに生かされ、焼け野原の東京が見事に立ち直った。私の父が彼に心酔していたのは、それがゆえであったのだろうか。

1923年、新平はソ連極東代表ヨッフエを私的に東京に招いた。革命後絶縁状態だった日ソ国交回復を図ったのだ。テレビでそれを聞いたとき、私ははっとした。その時の通訳が義父であったのだ。若い頃ペテルブルグ大学で研さんを積んだロシア

語が大いに役立ったことは亡き私の夫から聞かされていた。「父は、言語だけでなくロシアの歴史も民族の気質も知り尽くしていたようだ」と。

義父とヨツフェ二人がボートに乗って、親しそうに話している写真を見たこともある。新平の意に沿って、芳沢謙吉とカラハンとの正式な交渉が始まり、1925年に日ソ基本条約は調印された。義父の献身的な努力も報われたようだ。

1929年、新平は惜しまれながら世を去った。一方、義父はハルピンで拉致された後、1950年モスクワで獄死し、私は会うこともなかった。しかし、この夜、偶然見たテレビで新平の偉大な足跡が分かり、義父が彼と重要な関わりを持っていたことを初めて知って、感慨深い一時となった。

さて、テレビのタイトル「後藤新平のいない日本」とは、世界情勢が不穏の折、大局から物を見る偉大な人が出て欲しいとの意であろうか。

水産加工品はこうして作られている(上) 林 英一 (86歳)

水産加工品は、日本人の食卓に欠かせない。大量の消費に応えるために、生産、製品化のそれぞれの段階で、専門の器械が活躍している。知られざる器械の幾つかを、取り上げてみる。原稿が、専門誌に掲載されたものと同じものなので、やや硬く、理解しにくいところもあるかもしれませんが、ご容赦ください。(林)

(1) フィレーマシン

当初は円盤ナイフ一枚刃を2枚組み合わせ、魚の中骨を挟み込むように魚体を断ち割る形からスタートしていた。ドイツ(ドイツ統一前の西ドイツ)バーダー社の精巧な機械が輸入されたがその精巧な作りの機械は高価格で大型魚の処理には良いがスケソウダラを大量に捌く、かまぼこ工場や沖合の漁船においては不向きであった。中型、小型の助宗を大量に捌くのにコスト的に合う国産機は、スリミの大量生産に欠かせない機械として発展し、バタフライ型の腹開きスタイルを生産する機械に特化していった。呼称はフィレーマシンのままである。

国産メーカーでは株式会社フィレスターとタクボ工業(現東洋水産機械株)の2社が競ったが洋上スリミ生産がなくなった今は大型機の新規の製造はほとんどない。

昭和44年(1969年)大洋漁業株式会社、日本水産株式会社など大手水産会社がトロール船に採用をしたのを契機にヘッドカッターと連動した機械に発展、洋上スリミの生産に多大の貢献をした。

洋上スリミの生産が盛んになったので国内の陸上工場では、この種の機械を使用せずに済むようになった。養殖ブリや銀サケ用のフィレーマシンは歩留を追求するバーダー社の機械を使用した。現在は国産でも歩留の向上した3枚卸のフィレーマシンが出来てきている。

小型魚の処理機は、かつて西ドイツから昭和37年(1962年)にニシンのフィレーマシンが輸入されたが日本では故障時の部品の手配や運転時の調整に問題が出て普及しなかった。

当時様々な機械が輸入され、これに触発されて多くの水産機械が生まれた。

(2) ジュール熱利用装置

ジュール熱による食品加熱の理論は、電気抵抗の研究に端を発し、既に 19 世紀ヨーロッパで食品加工への応用も研究されてきた技術である。昭和 20 年(1945 年)頃の USA の漫画雑誌にステーキに電気を流すことでステーキが好みの焼き具合になり子供が感心する場面があった。

第 2 次大戦後に一般に知られたのは電極パン製造装置としてであった。加熱技術としてのジュール熱は通電コントロールで温度・加熱状況の調整が容易で熱損失が少ないという理想的な熱源であったが、これの利用が始まるのはしばらくかかった。

国内では昭和 61 年(1986 年)ごろ全国蒲鉾水産加工業協同組合連合会(全蒲連)が、株式会社フロンティアエンジニアリングに水産練り製品への応用を依頼し、全蒲連研究所水産学博士柴眞氏の指導の下、同社において開発が行われた。

平成 2 年頃(1990 年代)に研究室のラボ機から実用化に成功し、練り製品産業で広く使われるようになった。仙台名物ささかまぼこもこの原理で焼成している。

これを利用した加熱食品は現在モズク、かまぼこ、粘性の高いエキスなどがある。モズクはパイプの中を通過する方式で加熱し、そのまますぐに冷却パイプに入れることで作業効率がアップし、品質も向上している。かまぼこの加熱のために始まった研究であるが、ジュール加熱の利点が電気エネルギーがほぼ 100% で利用でき、水などの熱媒体の必要性が少ないなど排水処理でもコスト減となるなどその影響は多大である。

(3) コンピュータースケール自動計量機

魚体の選別にはローラー式が一般的であったが、コンピュータースケールの性能が上がり特に秤メーカーでは古参の株式会社イシダが、昭和 47 年(1972 年)代には安定した秤量の秤として世に出してきた重量での選別方式により、体幅で選別するローラー式は席卷された。

魚体をコンベア上で計測してバーでスライドさせてかごなどに落とし込む、比較的見た目も単純なものから、商品を個々に計量し、それぞれの計量値を使ってコンピューターが最適な組み合わせを選び、設定した重量に合わせて容器に入れるといったものまで出現した。

原理は商品を個々に計量し、それぞれの計量値を使ってコンピューターが最適な組み合わせを選び、設定した重量に合わせて容器に入れる方式である。特に後者の組み合わせ計量機は世界ではじめとなるものであった。

今は 0.5g ~ 1.0g の計量精度による高精度計量を最大 210 回/分の高速稼働が可能になっている。実際に筆者が使用したものはこれほどの高速稼働は必要なかったが、エビや小型のボイルいかの個体を計測して傘状の滑り台で一定量となるようにバケットに纏めてからシュートに流して 250g ずつトレイに測り取る、そのスピードと正確さは省人化とコストの削減に役立った。

(4) バンドソー

木材や氷を切断していた“のこぎり”が、冷凍のカツオ、マグロの処理には欠かせなくなっている。それも円盤式の回転刃がエンドレスのベルト式の物になり、大きなものが容易に切れるようになって普及した。この機械がなければ超低温のマグロの処理

は簡単にはできなかつた。

メーカーの秋山機械株式会社によればによれば国内外を含め 5,000 社で冷凍の魚、畜肉、とり肉に使用している由。

昭和 47 年(1972 年)に冷凍マグロの専用機械として生産が開始された。慣れぬ作業員が怪我をする事例が時にあるが、これなしには鮮度の良いマグロの刺身が安価には我々の口には入らなかつたと思われる。今やこの機械は、小型魚のサバからサケ、サワラの中型魚、ロブスター、カニの肩肉、足、親爪の二つ割、サケの切り身加工まで汎用性を高め、手作業を機械加工に置き換えて省力化に貢献している。機械は水や汚れに強く、耐腐食性にもよく、分解清掃も簡単で良い衛生状態を保持しやすい構造である。

「了解日本」(「日本を知る」(第 11 回)

兪彭年 (86 歳)

江戸文化の中の明・清文化 (前号つづき)

日本の「儒医」は、儒者であると同時に漢方医でもあつたのだ。1602 年、儒学者の林羅山が長崎に渡来した時に、明の李時珍の『本草綱目』を入手し、5 年後、幕府に献上した。以来、『本草綱目』は漢方処方教科書となり、「和刻本」がいくつも作られるようになった。

1672 年、儒医の向井元升が『本草綱目』の研究を命じられ、「庖厨備用倭名本草」を著した。17 世紀明朝末、清朝の初頭の戴曼公と陳明德(日本名 瀬川入徳)は拳術家陳元賛と長崎に渡来した。戴曼公は、明代の名医・貢廷賢の先輩で、杭州で開業していた時に『永陵傳信録』『寇事編年録』『殉国彙集』を著し、長崎に来てからは医者をしなから日本の儒医に天然痘を防ぐ「人痘法」を伝授していた。長崎では、曼公は神の医者と呼ばれていた。

日本最古の痘苗植栽本『種痘必須辨』(儒医緒方洪庵)によると、長崎に来た唐人李仁山が、中国の「唐山金鑑」を参考に長崎大浦の 20 人に痘苗を植えたという。儒教の寺である長崎三山寺では、儒教だけでなく漢方医学も教えられ、唐の博物館から漢方医を招いて講義が行われた。

徳川吉宗の許可を得て、1721 年に中国から陳振先を長崎に招き、薬草の鑑定作業を行い、向井元升の息子向井元成は陳振先とともに長崎近郊の薬草採集をした。明代の名医、龔廷賢はすでに 1611 年に『万病回春』を日本で出版しており、1660 年にも和刻本を出している。この医学書は、日本の儒学者の医師の必読書となった。この中に書かれている、認知症に対する「孔子大聖中之方」と小児神経症に対する「大聖奪命金丹」を総称して、日本の儒医は「孔子の処方」と呼んでいる。“江戸時代にはよく処方されていた。

明清時代の学者である朱之瑜(舜水)は、清朝との戦いと明朝の復権に失敗し、1659 年に長崎から日本に入り、まず筑後柳川藩の儒者安藤省庵の師となり、朱之瑜に俸禄の半分を与えた。朱之瑜は感謝の気持ちとして、中国から持ってきた三尊孔子像を安藤省庵に贈っている。(現在 一体は湯島聖堂、一体は福岡県立伝習館高校、一体は柳川の安藤省庵記念会の中にある)

1665 年、水戸藩主の招きで江戸に赴き、儒学を教え、儒学者木下春庵らと親交を深め、水戸学の発展に大きな功績を残した。朱之瑜は礼節や建築も教えていた。「湯島聖堂」(東京都文京区湯島)は、朱之瑜が徳川光圀制作した聖堂模型を研

究し建造し、江戸時代、水戸侯の別宅庭園であった小石川後樂園は朱之瑜が設計した。朱之瑜は徳川光圀に高い感銘を受け、死後日本学者文恭先生と称し、徳川光圀親子は「舜水遺書」を出版した。

長崎に住んでいた中国人は、日本人が「唐寺」と呼ぶ興福寺、福聚寺、崇福寺を建て、中国からやってきた高僧を住職とした。1654年中国福州付近の黄檗山(おうばくさん)万福寺住職、隠元(名は隆琦)高僧は興福寺第三代住職逸然性融の招待を受け20名の弟子とともに鄭成功の手配した船で長崎に到着し、興福寺に入り、その後崇福寺に移った。

1658年に隠元は江戸で第四代將軍徳川家綱に謁見し、1659年に京都宇治の土地を賜り、隠元は寺院を建立した。隠元が建立した寺院は中国と全く同名の黄檗山万福寺と名付けられた。寺院建築の様式と内部施設の配置は完全に明朝末期の様式であり、当時日本の寺院とは異なっていた。

寺院内の活動や儀式は全て中国で行われたため黄檗山万福寺は日本人の人々に完全に中国の寺院という印象を与え、その違いと新鮮さは日本の仏教界や文化界に衝撃を与えた。隠元死後、木庵性瑫(もくあんしょうとう)が住職となり、その後も中国の高僧が住職となり合計15名の中国の高僧が住職となった。

隠元は臨済宗の僧であり、臨済宗は念仏禅、つまり念仏を加えた禅で、明朝時代に広まった。隠元は来日後、臨済禅の普及に尽力し、明の時代の梵唄や方式を伝授し、日本黄檗宗の創始者となった。(臨済禅は臨済宗と区別するために、明治維新後に黄檗宗と改称した)日本の太上天皇から大光普照国師称号を賜った。

日本に元々の臨済宗とは異なり、日本人にとって臨済禅は新鮮であり、日本の藩主や上級武士に人気があり、徳川綱吉の重鎮柳沢吉保から黄檗宗は支持を受け、江戸に黄檗宗の寺院が次々と建立された。その中心として、黄檗宗二代目木庵住職は芝白金瑞聖寺、深川の海福寺、本所の弘福寺、青山の海蔵寺などを建造した。

日本の書道界では隠元などの黄檗宗僧侶の書道が新鮮で、自由、大胆、雄大と高い評価を受け、黄檗宗僧侶の書道は江戸時代の「唐様」(書家文徴明が代表とする中国明朝時代の書風)の先駆けであった。隠元、木庵と即非如一(そくにひよいつ)の三人は「黄檗の三筆」と呼ばれ、彼らの書道は日本書道界に大きな影響を与え、人気を博した。また、隠元らの山水画も人気が高く、影響力があった。

黄檗宗僧侶と長崎の中国人のお茶の入れ方飲み方は日本人にはとても興味深く、それらを真似て作られたのが、現在日本で最も一般的な緑茶の飲み方である「煎茶」である。千利休が大成した茶道は江戸時代も盛んであったが、一般民衆には抹茶が高価であり、茶器も精巧なため、茶席でお茶を飲むのは上級武士か豪商に限られていた。煎茶は抹茶と異なり、水ひとすくいで飲むことができるので、非常に簡単であり次第に普及していった。

宇治と静岡地区は茶の栽培をするようになると、国産茶が大量に出回り、煎茶も手に入りやすくなったので、徐々にお茶を飲む人口が増えた。また、日本の陶磁器産業の発展も、煎茶の普及に貢献した。かつて一般家庭の食器は木製のものが多く、陶器は手が出なかったが、江戸時代に陶器が大量に生産され、庶民も陶器の茶碗を持つようになり、お茶を飲むことが容易になった。

黄檗宗僧侶が食べていた精進料理は、日本人にも注目され、次第に広まり、日本では「普茶料理」、「寺卓袱」と呼ばれるようになった。

黄檗宗では人にあげるお茶を「普茶」と呼び、日本人は黄檗宗の精進料理を普

茶料理と呼ぶようになった。「卓袱」は主人と客がテーブルを囲んで椅子に座る新しい食事スタイルということで、「寺卓袱」となった。

また日本人は現在食べているインゲン豆や扁豆は隠元が中国から持ってきた種を栽培したものでインゲン豆（隠元豆）とよばれるようになった。黄檗宗は中国と日本の文化交流に重要な役割を果たし、新しい仏教の宗派だけでなく、明代の寺院建築、建築装飾、書画、中国の食文化なども広めた。

サツマイモは、中国では一般的に紅イモ、白イモと呼ばれ、地域によって番薯、山芋、地瓜、紅苕と呼ばれる。日本では一様で、「甘薯」という言葉が使われているが、これは学名であり、九州では「唐芋」、関東では「さつま芋」と呼ばれることがほとんどである。

これは、江戸時代初期にサツマイモが中国から琉球を経て九州に広まったため、九州では「唐芋」と呼ばれ、江戸時代中期に九州の薩摩地方から関東に移植されたため、関東では「さつま芋」と呼ばれたことに由来する。以来、日本では長い間、サツマイモは主食に代わる重要な食材の一つとして親しまれてきた。

8代将軍・徳川吉宗は、中国の明律を精力的に奨励した。徳川吉宗は紀州藩主徳川恒孝の子で、紀州藩主は明法（明律）の研究に力を入れ、儒学者の榊原篁洲に命じて『大明律例諺解』を著述させた。

徳川吉宗が紀州藩主になると、儒学者の高瀬学山に命じて『大明律直解』に「平古止点」を標記し、榊原篁洲の子榊原霞洲と鳥井春沢の二人に『大明律例諺解』を補充改訂するよう命じた。徳川吉宗は将軍に就任してからも明律に関心を持ち続け、高瀬学山に研究をさせ、『大明律例訳義』を書かせた。

徳川吉宗は漢文を読む能力がかなり高く、専門家でも分かりにくい明律を日本語に翻訳する必要性を強く感じたため、儒学者に明律の翻訳作業、解釈作業を相次いで命じた。

徳川吉宗はまた、深見玄岱（中国人の高寿寛の孫で、長崎の唐通事をしたことがあり、儒学者と政治家の新井白石の推薦を経て、幕府の儒学教官をした人）に清朝が『明会典』に倣って制定した『清会典』を翻訳するよう命じた。これらの研究と翻訳の成果は江戸時代の裁判と刑罰の基本となり、入墨、杖刑などの刑罰は徳川吉宗が明律命令に基づいて採用したものである。

徳川吉宗は、明清の法律の学習と吸収に努めるとともに、庶民の道德教育の面で中国の儒家道德をモデルにして普及に努めた。

明太祖朱元璋は『六諭』を制定し、これによって庶民を教化し、その内容は「父母に孝順にせよ、長上を尊敬せよ、郷里に和睦せよ、子孫を教訓せよ、各々生理に安んぜよ、非をなすなかれ」である。

清朝の初めに範鋌は『六諭回義』を書いて『六諭』を解説した。『六諭衍義』は琉球を経て日本に伝えられた。徳川吉宗は『六諭衍義』を読んだ後、庶民を教育するのに役立つと考え、儒学家の室鳩巢に日本語に翻訳するよう命じ、儒学者の荻生徂徠に「平古止点」を表示させ、『六諭衍義大意』の書名で出版させた。

江戸時代には中日両国は政治的に往来がなく、経済的には唐船貿易（つまり中日民間貿易、明清が海禁を実施した時に明らかに民間密輸貿易になった）があり、文化的には日本は明清文化を大量に導入し、両国関係を見渡すと平和的に付き合っていた。

19世紀後半、江戸幕府も中国清朝も西側列強の堅船利砲に直面し、いずれも

西洋列強と不平等条約を締結せざるを得なかった。西洋列強は中国を脂身（肥えた贅肉）とじっと目を凝らし見張っていたが、日本に対しては貧しく痩せているため興味が薄かった。そして中日両国が歩んできた道は異なり、中国は次第に半封建半植民地の境地に陥り、中国人民は次第に困難で曲がりくねった救国革命の道を歩み、日本は、江戸幕府を終えて明治維新を実行、大日本帝国時代に突入して対外侵略によって拡張された軍国主義戦争の発展の道を歩んでいった。

有楽町 慕情（8） 津田孚人（85歳）

「石坂泰三元社長のこと」

古い本を整理していると、「勇氣あることば」（石坂泰三著・出版社・読売新聞社・昭和45年6月）が出て来た。あとがきを読むと、「（昭和44年10月）財界の”明治パワー”石坂泰三さんに、万博を前に東奔西走してお忙しい時だったが無理を承知でエッセー集をお願いした。自叙伝嫌いで、照れ屋で通っている石坂さんが、しぶしぶ苦笑をうかべながら内諾してくれた。石坂さんの口述は11月から始まり、のべ7回、二十数時間におよんだ。」

この本は、口述筆記を基本に、石坂さんが発表された旧原稿を資料にして、まとめ上げた」とある。

石坂元社長については在社中にほとんど聞いたことは無かった。「第一生命元社長」と、「経団連会長を4期務めた財界総理」との間のギャップは非常に大きい。

内外ともに、第一生命は”矢野さんの会社”で済まされていたが、第一生命の業界内順位を一気に2位まで押し上げたのは石坂泰三だった。第一生命退社後、東芝の社長になり、労働争議を解決して財界の中央に押し出された石坂泰三を、第一生命社内が当時どのように評価していたのか、気になり、興味をそそる。

「勇氣あることば」を読むと入社前の経歴や入社の際の経緯、そして第一生命に対する本音が分かる。やはり、戦後の矢野体制になった第一生命と何らかの確執があったと考えるのが自然のようだ。第一生命の社史（77年史）と「勇氣あることば」の両方から、当時の模様を当てることにする。

先日、第一生命とは関係がない60～70歳の人たちに、“石坂泰三”を知っているか聞くと、知っていたのは約3割、知らない人の方が多かった。”石坂泰三”を知らない経済人がいることに驚いた。驚く当方に驚くと言われそうな時代になったようだ。よって、まず簡単な略歴を。最近、スマホで検索できる便利な世の中になりました。（石坂泰三・略歴）

”1886年（明治19年）6月～1975年（昭和50年）3月。日本の財界人、経営者。通信省を退官後、第一生命保険に入社。第一生命保険、東京芝浦電気（現東芝）社長を経て、経済団体連合会（経団連）第2代会長に就任、（在任、1956年2月21日～1968年5月24日）。経団連会長を4期、12年務めた。経団連会長の異名「財界総理」は石坂泰三を嚆矢とする。正三位勲一等。”

石坂泰三”の入社については、第一生命77年史（昭和47年9月発行）では、以下のように紹介してある。（p44）

”大正4年9月7日、のちに第3代社長になった石坂泰三が入社した。前年3月、前の支配人が退社し、その後は支配人を欠いていたが、創立者の対外活動はますます激しさを増し、社内を統括する適任者の必要を感じていた。そこで岡野敬次郎に適材の推挽を依頼したところ、岡野は教え子の中から石坂泰三を推薦してきたのである。

当時石坂は逓信省為替貯金局の課長の地位にあり、その洋々たる前途を嘱望されていた。岡野の推すところとはいえ、石坂は第一生命に転職するについては、はじめなかなか決心がつきかねたという。

第一生命はいかに優良会社であるにせよ、当時は官尊民卑の時代である。俊材にして官途にあれば、出世栄進はさしたる難事ではなかったに相違あるまい。石坂は遠からず下野して、自己の途をひらく公算ではあったが、さりとして、いまただちに岡野の指示に従う心境にもなれなかった。

そこで、石坂は、転進すべきかどうかについて自分の畏敬する先輩に相談することにした。しかし、意見を求めた勸銀総裁の志村源太郎（石坂夫妻の媒酌人）も金子堅太郎伯（石坂夫人厳父の上司）も、案に相違して第一生命入社に賛成した。石坂は首をめぐらせてあらためて三思し、第一生命入社を決心した。“

一方、「勇氣ある言葉」では、逓信省入省から第一生命入社に至るまでの経緯をこのように、本人が語ったことになっている。

”逓信省に奉職したのは、明治44年（1911年）7月、法制局長官で東大教授だった岡野敬次郎先生の紹介だった。逓信大臣が後藤新平、最初の配属が貯金局、局長は下村宏（海南）。逓信省に一緒に入ったのが、牧野良三。一高時代のクラスの前後にいたのが重光葵、小笠原三九郎、芦田均、五島慶太、吉田茂、正力松太郎、河合良成、木村篤太郎、といった錚々たる人たちだった。

高等官に昇進し、貯金課長となってしばらくしたとき、かつての振替貯金課長時代の部下の使い込みが発覚し、監督不十分で譴責処分を受けた。譴責処分はショックで、大きな譴責書を破り捨てた。

ちょうどその頃、政府事業として実施することになった簡易保険をめぐって、郵便局で扱わせようと考えていた下村宏貯金局長と、それに反対する民間保険業界、なかでも第一生命保険社長の矢野恒太との間で、激論が交わされていた。話の合間に、矢野から、「人材が欲しいのだがだれかいないか」との依頼があり、「5年前に逓信省へ入れた石坂泰三という男がいるがどうか」という話になった。

しかし、譴責処分にあったとはいえ、簡単に役人を辞めて会社へ転ずるには、それだけの覚悟が必要だった。

学生時代から実業界は、社長か、重役に、親か親族のいる身分のものの行くところと決めていたからである。とって、自分の性格は役人と肌が合わないの、いつかは役人生活に見切りをつけなければならないとも考えていた。悩んでいる私に対して家内はいうのであった。

「わたしは、あなたが国家の官吏だから、お嫁にきたのです。よその人から、お宅のご主人はどこにお勤めですかと聞かれて、生命保険だなんていうのは決まりが悪い。絶対にいやです」と猛烈に反対されたのだ。官尊民卑の時代だから家内の言い分にも一理ありと理解はした。

なにしろ、当時の第一生命は、いまと違って問題にならない小さな会社で、契約高も総額3千万円ぐらいに過ぎなかった。そんなことを、わたしたち夫婦の媒酌人であった志村源太郎さん（当時の勸銀総裁）にもち込むと志村さんは、「いや、小さい会社だから、むしろいいかもわからんな」といわれて賛成してくれた。

”鶏口”となっても”牛後”になるなということは、前からの信条だったが、わたしにはまだ不安があった。すると志村さんは、「君が保険界でうまくいかなかったら、わたしが骨を拾ってやるよ」といった。勸銀総裁が身元引受をしてくれれば、もう大丈夫だと考えるようになった。

またわたしは、金子堅太郎伯のところへも相談にいった。金子さんは家内の父の織田一が秘書官をやったこともある昵懇の関係で、金子さんは「役人もいいが、保険もいいだろう」といわれた。

こうしてわたしは転進の決意を固めて行ったが、家内は相変わらず反対で、前言をひるがえそうとしなかった。そこでわたしは、「それなら、その代わりにわたしは保険を大いに勉強して、博士号を取ってみせる」と豪語して、家内をとうとう説得することができた。これは家内に対する方便の嘘ではなく、わたしはほんとうに勉強して、法学博士かなにかをつもりであった。ところがこの約束は、家内の生前中には果たすことができなかった。

そして岡野敬次郎東大教授から引導を渡され、大正4年(1915年)の9月7日、第一生命に入社した。”

第一生命の社史と口述記「勇気あることば」と、入社に至るまでの経緯はだいぶ違う。石坂泰三の話は、そもそもは、貯金局時代の部下の使い込みから始まっている。入社については、学生時代から役人は肌に合わずと思いながら、自分では決められず、いろいろな人に相談している。

対象となった民間企業が、第一生命であったところに、不満があり、躊躇せざるを得なかった？ 様子がかうかえる。入社後については、次回にしたい。

講演会のご案内

新三木会

6月20日(火)第136回講演会 13:00～(13:15～4:30茶話会)

演題:『**財政・金融は持続可能か**』

講師:藤巻健史氏(一橋49卒・**米国ノースウェスタン大学ケロッグ経営大学院**修士)

(元モルガン銀行日本代表、元参議院議員)

申し込み先: <https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6>

または、メール shinsanmokukai@gmail.com

申し込みの際は、天地シニアネットワーク会員、又は天地メルマガ見たと伝えてください。

次回:7月20日(木)「激化する戦略的競争時代の核政策」

講師:秋山信将 一橋大学法学部教授

事務局

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所:〒116-0001荒川区町屋3-2-110

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス: tentisenior06@gmail.com

電話・FAX:03-3819-7651